

現代日本  
文學全集

47

吉藤

田森

絃成

吉郎

集集



吉田絃二郎集  
藤森成吉集

改造社版

杉浦非水裝幀



# 「吉田絃二郎集」目次

|          |   |
|----------|---|
| 序        | 四 |
| 卷頭寫眞(照影) |   |
| 詞(筆蹟)    |   |

## 小説篇

|                      |    |
|----------------------|----|
| 父 <small>ちち</small>  | 五  |
| 芭 <small>ば</small>   | 六  |
| 島 <small>しま</small>  | 六  |
| 静 <small>しず</small>  | 七  |
| 彼 <small>かれ</small>  | 九  |
| 草 <small>くさ</small>  | 三  |
| 冬 <small>ふゆ</small>  | 四  |
| 秋 <small>あき</small>  | 九  |
| 法 <small>はふ</small>  | 八  |
| 妙 <small>めう</small>  | 九  |
| 寺 <small>じ</small>   | 八  |
| 叔母 <small>おふ</small> | 八  |
| 船 <small>ふね</small>  | 九  |
| 夜 <small>よ</small>   | 九  |
| ダビデと子たち              | 一八 |

## 戯曲篇

|      |    |
|------|----|
| 清作の妻 | 一七 |
|------|----|

|                      |    |
|----------------------|----|
| 大谷刑部                 | 一八 |
| 狂人となるまで              | 二三 |
| 燕 <small>つばき</small> | 三〇 |

## 感想隨筆篇

|                         |    |
|-------------------------|----|
| 路上素畫                    | 二四 |
| 冬のうた                    | 二五 |
| 麥 <small>むぎ</small> のうた | 二五 |
| 憂鬱なる日よ                  | 二五 |
| 山を戀ふ                    | 二五 |
| 詩を生む心                   | 二五 |
| 霧島紀行                    | 二六 |

## 年譜 自作について

|                                                                              |    |
|------------------------------------------------------------------------------|----|
| 春 <small>はる</small>                                                          | 六  |
| 淺 <small>あさ</small>                                                          | 七  |
| 冬 <small>ふゆ</small>                                                          | 七  |
| 笹 <small>ささ</small> の鳴 <small>な</small> き                                    | 七  |
| 兄弟 <small>けいだい</small> の                                                     | 七  |
| 旅 <small>たび</small> の                                                        | 七  |
| 悲 <small>かな</small> しき玩具                                                     | 八  |
| 茶 <small>ちや</small> の                                                        | 八  |
| 静 <small>しず</small> の                                                        | 八  |
| 輪 <small>りん</small> 廻 <small>わ</small> の                                     | 九  |
| 雲 <small>くも</small>                                                          | 九  |
| 七 <small>しち</small> 月 <small>げつ</small> の空                                   | 九  |
| 黄 <small>き</small> 色 <small>いろ</small> な壁 <small>かべ</small> に                | 九  |
| 旅 <small>たび</small> 人は北 <small>きた</small> より                                 | 九  |
| 銀 <small>ぎん</small> の                                                        | 九  |
| 芳 <small>よし</small> 野 <small>の</small> 紀 <small>き</small> 行 <small>ち</small> | 九  |
| 年譜                                                                           | 一〇 |
| 自作について                                                                       | 一〇 |

# 「藤森成吉集」目次

卷頭寫眞(照影)

序 詞(筆跡)

小説篇

若き日の悩み

..... 三〇七

雲雀

..... 四一〇

日傘

..... 四二〇

ある體操教師の死

..... 四二五

拍手しない男

..... 四三一

戯曲篇

犠牲

..... 四三三

磔茂左衛門

..... 四六六

自作の憶ひ出と記録

..... 四九七

年譜

..... 五〇〇

吉田絃二郎集

十回あるの空の白む

いろあし鳥のうぐく方人の

夢いゝ金然とあるゆふのい

快く夜ふる大木の花の

ゆいやはけするころま川は桂

川のほとりにのじのとすい

いゆく春夕笛をきくやうて

いゝいゝ

# 父

何といふ鳥であらう。鶴鶴に似て鶴鶴よりは  
ずつと大きく、川の中の水に濡れた岩よりも黒  
い羽色をして、雪の朝の谿川の岩から岩へと暗  
い淵の蔭をもとめて低く飛んでゐる。

わたくしは去年も天城の奥のある湯の町でそ  
の眞つ黒な小鳥を見た。一日の中きつと一度は  
川上の方から川下の方へ谿川の面を矢のやうに  
飛んで行つた。いつも美しい谿川の水とすれす  
れに低く水の面を滑るやうに飛んで行つた。わ  
たくしの部屋窓の下は直ぐに、天城の奥から  
の流れになつてゐて、流れをへだてて暗く茂つ  
た木立があり、木立を縁取るやうに若い椿がま  
ばらに花を持つてゐた。花の下は小暗き淵にな  
つてゐた。眞つ黒な小鳥はよくその小暗き木立  
の下の淵の岩にぼつねんととまつてゐた。いつ  
もたゞ一羽で、啞黙つてゐた。

恰度四月の半ばごろだつたので雪も解けた  
天城の奥では、梢といふ梢には夜が明けるの  
を待ちかねていろ／＼な小鳥が囀つてゐた。狭  
い山峽にも菜の花がかゞやいてゐたり、靜かな

山徑の一握りのつちくれれまでが温かきうに日の  
光りをよるこんでゐるのに、あの眞つ黒な小鳥  
だけはうた一つうたふのでもなく、柔かな、  
梢にとまるのでもなく、ぼつねんとたゞ一羽で  
小暗き淵から淵をもとめて飛んでゐるのであつ  
た。

わたくしはこの啞黙つた眞つ黒な孤獨な小鳥  
を、伊豆の山から山と湯治客の稀な湯の町を選  
んでへめぐつてゐるわたくし自身の生活にくら  
べて見たこともあつた。

昨夜からの雪に埋められた湯の町の川底の中  
に、不圖去年見たあの孤獨な黒い鳥を見出した  
時、わたくしは去年の春の天城の奥の生活を思  
ひ出した。

わたくしがNの町の姉からの手紙で天城の奥  
から三島の方へ狩野川に沿つてあわたいしい旅  
立をしたのは四月も末に近かつた。

天城の溪々を馬車に揺られて、七八里の道を  
急がなければならなかつた。

Nの町の父が縁側から葉蘭の中に落ちて脚の

骨を折つた。と、たゞそれだけの短いたよりで  
はあつたが、わたくしはその手紙を讀んだ時、  
父に對してすまない事をしたと思つた。

Nの町には父の家から少し離れて姉たちも住  
んでゐた。孫たちもゐた。しかし父の家には父  
だけが住んでゐた。數年前に亡くなつた母の位  
牌を守つて、いつも薄暗い納戸につくねんとし  
てゐるか、葉蘭の茂つた縁側に出て獵銃をいぢ  
るか、自分で作つた薄い眞鍮の板金の雉子笛を  
吹くか、でなければ爐の傍に來て椿をくべな  
がら酒を飲んでゐた。

母が死ぬ少し前から父の兩脚は惡かつた。  
母が死んだ翌年の春姉嫁につれられて山の櫻  
木を見に行つたとき、それからは殆んど少し遠い  
道を歩くこともできなくなつてゐた。

老齡に似ず眼だけは人一倍、達者だつた。ラ  
ンプの光りで新聞のルビを眼鏡なしに平氣で讀  
むことができたほどであつた。だから來年は獵  
札を願つて一生の思ひ出に鐵砲を撃ちに行け  
と、いつも口癖のやうに云つてゐた。

父はまつたく故郷では並ぶ者もないほどの獵  
の名人であつた。まだ獵犬などを使ふことは  
やらぬころだつたが、父は雉子笛を吹くことは  
誰よりも巧みであつた。眞つ書間の鳥は遙して

も暗の夜の鳥は逃したことがないと言はれたく  
らる夜獵の名人であつた。長い間の不運な境  
遇や、貧しい、あつたゞしい生活に馴らされて  
ゐた父の心に、數年前からふたゝび若い日の銃  
獵に對するほとんど病的な熱情が頭を擡げて  
來たのであつた。

父は朝起きるから寝るまで納戸で雉子笛を吹  
いてゐることがあつた。

衰へ切つた父が納戸で雉子笛を吹いてゐる音  
を聴くたんびにわたくしは子供のころのことを  
思ひ出した。そのころは父は貧乏のどん底にお  
たので、わたくしの月々の小學校の月謝も満足  
には拂つてはくれなかつた。だからとても父  
に、獵札を受けるだけの金錢上の餘裕はなかつ  
た。父は人の獵札を借りるか、でなければこつ  
そりと銃を藁のなかに包むかして、わたくしを  
伴れて朝まだ暗いうちに山の中にはひつて行く  
のであつた。

わたくしは谷一つ隔てた山にしゃがんでゐて  
父の雉子笛の音を聴くのであつた。びいよ、び  
いよと子供心にもあはれな雉子笛の音が狭霧の  
底に響をへだててしづかに聞えて來るのであつ  
た。曉の星がまだ残つてゐた。

父はまたわたくしをつれて夜の咆撃ちに出か

けて行つた。高い草山の背を小半日歩いて、そ  
こ、この高原の澤だの、池だのを見まはつた。  
そして葦の中の鳥屋の中に日が暮るゝのを待つ  
た。

馬車の幌の間から、かゞやく櫟の若葉につ  
つまれた裏伊豆の山々が見えた。わたくしはそ  
れらの草山を眺めながらあのころの父を思ひ出  
した。父はどこにゆくにもわたくし一人をつれ  
て行つた。

母に死なれてしまつた父がたゞ一人で薄暗い  
Nの町の家を守つてゐる姿を思ひ出しては、年  
中、旅をへめぐつてゐるわたくしは、幾度か暗  
い心にとざされてしまつた。

「お前はなぜ父の家に歸らないのだ。」  
そのたんびにわたくしは自分で自分を叱る氣  
にもなつた。

納戸で鐵砲をいぢつてゐる父、雉子笛を吹い  
てゐる父、爐の前にたゞ一人でつまらなさうに  
酒を飲んでは寝ころんでゐる父……を思ひ出す  
ことはわたくしにとつて耐らないことであつた  
が、わたくしはやつぱり旅に出て父の家には歸  
らなかつた。

親といふものが、どれほど子を持つてゐるか  
といふ心持ちは、たとひまだ一人の子供も持た

ぬにしろ、ほゞもうわたくしの年輩になれば想  
像はつく。親の寂しい心は想像しながらもわた  
くしは父の家には歸つてゆかなかつた。

「もしわたくしが父と一緒に家にゐたら父はど  
んなに喜んでくれるだらう。わたくしが一緒  
だつたら父は縁側から落ちなかつたかも知れな  
い。」近くに姉たちが住んでゐたにせよ、父をた  
だ一人Nの町の家にのこして、旅をつゞけてゐ  
るわたくし自身のエゴイスチックな心を責めな  
いではをられなかつた。

父にとつてはわたくしはたゞ一人の男の子で  
ある。父がどれほどまでわたくし一人を頼りに  
してゐたかといふこともわたくしには想像がつ  
く。しかしわたくしは父の家には滅多に歸つて  
ゆかなかつた。

不運なる父と子！ わたくしは父とわたくし  
自身との關係を客觀的にながめていつもかう  
思ふのであつた。形の上から言つても、心と  
心との關係から言つてもわたくしたちの關係  
はあまり幸運ではなかつたやうに思ふ。

「父や母と別れて生きてゐなければならぬくら  
ゐなら、自分は乞食になつてもいゝから學校を  
止めて父の家へ歸りたい。」  
神學校の寄宿舎にゐたころわたくしは禮拜

堂の塔の上で幾度となく、夜の祈禱會の後、こんなことを考へたこともあつた。

あのころの父に對する、私自身の純な心持ちが、まるでまががつた世界の思ひ出でもあるやうに、わたくしの心に映つて來ることもあつた。時といふものが人間の心の上に與へる恐ろしい變化について考へないではなかつた。わたしの心は暗くされた。

「父と子！」わたくしは幌馬車の中で同じ言葉をつくりかへした。そこには二つの生存の間に言ひやうもなく懐かしい力が動いてゐた。不可思議な因縁の力が動いてゐた。と同時に言ひやうもなく寂しい、冷たい影が。

わたくしは自分を責めても見た。しかしそこにはわたくし自身のエゴイスチックな心以外にさらに或る力強い自然の力が動いてゐるのではないかと思つた。

父に對してわたくしは二十年前のわたくしの心を持つてはゐなかつた。

脚の骨を挫いてあの薄暗い納戸に仰臥したまゝわたくしを待つてゐるであらう父の倅を思ひ出しては父を案じながらもわたくしは、幌馬車の中から雲雀の聲を聴き、草山の春の光りをたのしみほどの餘裕を抱いてゐた。何の悲し

きも持たぬ旅人のやうに窓によりかゝつて春の山を眺めてゐるわたくし自身をかへり見て、わたくしはふたゝび「不運な父と子」の姿を描いてゐた。

ばささ梢の雪が音を立てて川に落ちた。黒い鳥は冷たい水の面を滑つて川下の方へ飛んで行った。

去年の春の日の追憶は破られてしまつた。わたくしは雪の中の川を見つめたまゝ、橋の袂に立ちつくしてゐた。

「わたくしにはもう父もない！」雪の川の中を越の下に首を突き込んで眠つてゐた四羽の眞白な水鳥が急に羽叩きをして流れを上つて行つた。

父につれられて高原の澤や池のほとりを、葦を分けて歩きまはつた日、父にはぐれて、高い葦の中で泣かんばかりになつて父を呼んだ子供時代のさびしさがその刹那わたくしの心に取りもどされて來た。

×

わたくしは谿川に沿うて湯の町を山の方へ歩いて行つた。

二番目の橋の袂で、わたくしは十年ばかり前

からこゝの湯の町で額馴染になつてゐるTといふ男に逢つた。Tはもとながいこと船に乗つてゐたのであつたが、こゝの湯に來て妻を買つて、今では椿油の店を出して、ちよつとの間も手を休めないほどにまめ／＼しく働いてゐるのであつた。

「まあ珍らしい、いつもの××屋にお泊りですか？ ぜひお遊びに……」

「おかみさんも丈夫ですか？ ありがたう。あなただ病氣で入院なすつたつて？ 大事になさいよ。」

わたくしはTと別れて橋をわたつて行つた。Tにも子供はなかつた。

わたくしはTの顔を思ひ出した。わたくしはTが何のために入院しなければならなかつたかといふこともほゞ想像することができた。

「あの人も相當金はできたやうですが子供がないものですからついねえヘッヘッ……えゝやつぱり寂しいんでせう。」わたくしは××屋の女中の話を思ひ出して、もちど振りかへつて見た。Tは大儀さうな足どりで川下の方へ歩いて行つた。子供を持たぬ中年の男の寂しい影がTのうしろ姿をつゝんでしまつてゐた。

十國峠の山の背の雪が眞つ白に湯の町の屋根

越しに遠くに眺められた。

わたくしはいつものやうに××寺の山門の橋をわたつて狭い石ころ道を山の方へ歩いて行つた。

低い煤けた軒のあたりからかすかな湯の香が漂うて來た。

日が雲の切れ目から照り始めて來た。屋根の雪が倦怠い音を立てて道の上へ落ちたりした。

いつの間にか數年前まで水車小屋があつたあたりに藝妓屋が二三軒立ち並んでゐた。わたくしは藝妓屋の前を通り過ぎて氷でついた石段を経堂の方へ上つて行つた。

經堂の横の少し高いところに昔この湯の町で殺された若い源家の將軍の苦むした塚があつた。その若い妻や子供たちの大小三つの輪塔が雪の中に埋もれてゐた。

わたくしは輕く頭を下げて將軍塚の裏をさらに松山の方へ登つて行つた。松山の上の番人が今朝早く雪を掻いて道をつけて置いてくれたので道は思つたより樂であつた。

將軍塚の直ぐうしろに綻びかけた一株の紅梅があつた。わたくしは不圖ひよう……ひよう……と鳴く小鳥の聲を聴いて紅梅の下に立ち

止まつた。

わたくしは紅梅の梢をつゝいては啼いてゐる一羽の鶯を見出した。

梢をつゝくたんびに柔かな胸毛がほんのりと紅く雪の中に動いた。

三十年前である。故郷を出てNの町に來た父は轉々として小ひさな家から小ひさな家へと移つて行つた。

新開地のNの町はまだそのころは葦に掩はれた澤だの、麥につゝまれた丘ばかりであつた。

父はひろい麥畑の中に小屋を立てた。小ひさな杉の丸太だの竹だのを運んで來て、手斧だの、鋸だのを器用に使つて父は自分ひとりの手で獨立小屋を作つた。

三間に二間半の獨立小屋であつた。荒壁のままで、屋根はこけら葺きであつた。はひり口から裏までは突きぬける土間になつてゐて、裏口にちかく土間に、ぢかに、土の竈があつた。

亡くなつた母はいつもその竈で藥火を焚いたり、父に擲られては一人で竈の前で泣いてゐた。薄暗い竈の前で泣いてゐる母を見たらん

びにわたくしは母を氣の毒だと思つた。亂暴な男、暴君的な父に對するかすかな反抗をすら感じた。

麥畑の中の小屋を父の手で作つて貰つた時わたくしたちはどんなに喜んだか知れない。ともかくわたくしたちは故郷を出てから幾年目かにはじめて自分らの家を持つことができたのだから。

麥畑の中の小屋の間に籠がつるされてあつた。中には一羽の鶯がいつも、麥畑を吹いて來る柔かな風を浴びながらひよう……ひよう……とさびしい聲で鳴いてゐた。

將軍の墓のうしろの紅梅の梢に鳴いてゐる鶯を見た刹那にわたくしは、麥畑の中の小屋や、軒の鶯のことを思ひ出したのであつた。

或る日わたくしは父に連れられて幾つかの草山を越えて行つた。父は鶯を入れた籠を風呂敷に包んで抱へてゐた。父は道々草の實を取つては籠の中に入れてやつた。

父はちよつとした森の縁に來ると風呂敷から籠を取り出して梢に懸けた。そして綱をつけた棹の枝を籠の上に置いた。

父につれられてわたくしは木蔭に隠れてゐた。ひよう、ひようときびしい鶯の聲が木蔭まで聞えて來た。

わたくしたちは終日山を歩いた。しかし一羽の鶯も取ることはできなかった。

その翌日であつた。父や姉たちは働みに出かけて家にはゐなかつた。わたくしと母だけが小屋にゐた。母はわたくしの肩の絲を拵へるために麻苧をつむいでゐた。

懶い初夏の風がかすかに麥の穂を戦かしながら小屋の窓へ吹いて來た。

わたくしは晝飯を食つてゐた。軒の籠ではしつきりなしに鶯が鳴いてゐた。

幼いわたくしの心にも六月の日の光りや、柔かな風や、麥の色、小鳥の聲はこの上もなく恵まれたものとして映つてゐた。少年の心は無上に躍つた。

しかしわたくしの喜びに充たされた心はずぐにめちやゝに叩きのめされてしまつた。

わたくしが箸を置いて立ち上つた刹那であつた。わたくしは鶯がはたと鳴き聲を止めてしまつたことに氣付いた。同時に鶯の姿が見えなくなつたことを。

わたくしはあわてて母を呼んだ。

母は軒から籠を卸した。鶯は籠の底に落ちたまゝ死んでゐた。

餌壺には一粒の草の實もなかつた。

わたくしは鶯の死骸を抱いた。柔かな胸毛の接觸があはれであつた。

わたくしは鶯の死骸を抱いたまゝ泣き出してしまつた。

あの時の懶い風が、ぎら／＼と照つた日の光りが、やさしい母の眼が、雪の中に佇んでゐるわたくしの頭にさながらにやみがへつて來るのであつた。

春の高い父が白い顔をして、籠を抱へて笑ひながら雪の中を下つて來るやうな氣がしてならなかつた。

わたくしは鶯の聲を聴きながら雪の中を松山の方へ登つて行つた。

×

雪の夜に父の轍をNの町の山の火葬場に送つて数日後にわたくしはたゞ一人でNの町を立つた。

父や母が生きてゐる間はわたくしは年に一度か二度はNの町をたづねた。そこには小學時代の友人もゐた。Nの町はわたくしにとつて第二の故郷といふよりは、むしろ第一の故郷であるといつた方が正しいかも知れぬ。

然しもう父もゐない。母もゐないといふことになれば、わたくしは滅多にNの町を訪ねることもないであらう。

Nの町にのこつて、Nの町の土にならなければならぬ二人の姉たちのことを考へると離愁といふやうな淡い寂しさがわいて來ないではなかつた。

姉や妹たちは父の家の桃の木の下に立つて、わたくしを見送つてくれた。姉たちの眼は赤かつた。

わたくしは東京にかへるのも嫌であつた。Nの町からの歸りを急に三島で下りて伊豆の温泉場へ來てしまつた。

わたくしはこの數年來のオーヴァウオークのためにかなり疲れてゐた。わたくしは思ひ切つて心ゆくまでしづかに伊豆の山で父のことも思ひ出して見たかつた。父を失つた悲しみに浸つても見たかつた。

月々Nの町の父にわづかの金を送つてやつて、父が喜ぶ顔を想像しては夜も晝も働いてゐたのであつたが、父がゐなくなつたことを考へると、わたくしは東京にかへつて働く氣にもなれなかつた。

「子供一人あるんぢやなし、今日からはたゞ食つてさへ行けばいいのだ。」

わたくしはこんなことを考へては馬車の中から山をながめてゐたこともあつた。

山に登りつめたところはかなり廣いなぞへを作つた松林になつてゐて、素直に伸びた赤松が快いほど盛々と並んでゐた。

そこには松林の間に亭見たいな茅葺きの家があつて、屋根は苦むして半ば落ちかゝつてゐた。しかし北向きの一室だけは雨も洩らず、仕切られた爐もそのまゝになつてゐた。

山番の家はその茅葺きの家からは二三十間へだたつた松林の蔭になつてゐたが、わたくしは偶然にもその山番の男を知つてゐたので、暇さへあれば松山の中の家へ来て終日爐の傍に坐つてゐた。

「ほんたうにお珍らしいぢやありませんか、またこんなところで お目にかゝるなんてねえ旦那！」  
山番の男は番小屋の方から櫓を抱へて来ては爐にくべた。

二三年前わたくしはこゝから七八里奥の天城の湯の町で春を過ごしたことがあつた。

そこにはたゞ二軒の宿屋があるだけで、書になれば田舎から出て来た湯治のお客たちは川原に出て流れ木を拾つたり、櫓の下の流れで米を洗つたりしてゐた。

或る小糠雨の朝、湯の町の出はづれの水車小

屋の裏から若い女の死骸が発見された。女は關西あたりから来た宿のお客だつた。その女の死骸を抱き上げたのが、こゝの山番の男だつた。そのころ、かれはその宿屋で走り使ひをしたり、薪を割つたりして居たのであつた。

かれを案内にしてわたくしは山藪の根を掘りに行つたり、石斑魚を釣りに出かけたことが二度もあつた。

六十に近いであらうかれは妻もなく、子もなく、人に使はれては天城の谿の間の温泉町を浮草のやうに歩きまはつてゐるのであつた。

「今日も旦那はきつと登つておいでだらうと思つて雪も掻いときましたよ。」かれは小鼻に皺を寄せながら笑つて、大きな木の根つこを爐の中に投げた。

「ばかに歩きよいと思ひました。ありがたう。」

「雪を掻いとかんぢや、わしだつて町に下りられんで。この分ぢや奥の方はずゑぶん積つたでせうぜ、また奥の方では猪の奴が畑を荒らしに来るにちがひない。」

「これぐらゐの雪でも猪が出て来ますか？」

「来ますとも、一週間はかり前の雪でもこゝから二里ばかり上の山で二疋とれましたぜ、鶏小

屋の横に猪の皮が干してありましたらう。」

「うむ、あの皮？」  
「あの黒い皮です。わたしが皮だけ貰つて来て干しときましたのぢや。」

山番の男は大きな土瓶や茶碗を爐の傍に置いて雪の中を番小屋の方へ下りて行つた。

去年の春ころまでは東京から毎年のやうにKといふ有名な長唄の師匠が来て、××屋の方から晝飯を松山まで運ばせて、終日この茅葺きの家の中で櫓を焚いてぼつねんと爐のわきに坐つてゐたといふ話をかの山番の男が語つてゐた。

Kといふ長唄の師匠は、わたくしは幾度も有樂座で見たこともあるし、その美しい聲の歌を聴いたこともあつたので、わたくしひとりで爐のわきに坐るたびにKの白い顔や美聲を思ひ出した。

その窓からは狩野川の畔から分れてこの湯の町へ来る白い道が山の峽を縫うてゐるのが見えた。時折、がた馬車が白い道を走つて行つた。湯の町の中央に控へてゐる××寺の鐘の聲が山の麓から松山のう上で響いて來ることもあつた。また時としては天城から流れて來る谿川の水の音が思ひ出したやうに聞えて來ることも

あつた。

しかしそこでは何も彼もあまりに静かであつた。そこではたまたま犬を連れた獵人を見るか薪を積んだ小馬を見るか、その他にはほとんど人を見出すこともなかつた。人間の聲を聴くこともなかつた。

たまに兎を追ふ犬の聲を聴いたり、麓の峽を蠢動してゐる小ひきな黒點のやうな人間の姿を見出すことによつて、山の静寂は一層深められて行つた。

火が消えさうになつて來るとわたくしは下りて行つて落松葉を掻き集めて來た。落松葉のはぜる音が寂しく、わたくしの心の奥までも響いた。

わたゝしは手を火にかざしながら高く空をかすめてゆく静寂な松籟の音を聴いた。

わたくしは眼をつむつた。快い爐の焚き火のぬくもりがわたくしの兩手を、胸を、膝を柔かにあたゝめてくれるのであつた。

わたくしは眼をつむつてゐても、東の窓から見える足柄、乙女、十國の雪につゝまれた山の背から背を想像することができた。

西の窓からは天城の巔が見えた。

そこからはたゞ雪につゝまれた幾重もの山の

頭のみを見ることができた。

わたくしはたゞ一人で廣い自然の静寂の真ん中に抛り出されてゐるのであつた。

わたくしはそこにある間、すべての人間との交渉を斷つことができた。わたくしはたゞ木や光りや風とのみ交渉を持ちつづけてゐた。

わたくしは眼をつむつた。そして自分自身の瞑想を、深山の禪僧たちの坐禪の生活になぞらへて考へることもあつた。それほど松山の中の生活は單調であり、原始的であり、静寂であつた。

かつてわたくしは或る一人の若い大學教授を誘つてこの松山の上に連れて行つたことがあつた。恰度日が暮れかゝつてゐた。富士から南アルプスの雪の連山が薔薇色に染められてゐた。

伊豆も駿河も山の麓はみな暮れてしまつてゐた。かれは暗の中にそゝり立つた山の偉大な姿に直面した刹那に、

「あゝ、こゝに來れば社會問題もない、労働問題もないね君！」と心からの溜息をもらした。かれは熱心な労働問題の研究であり、實際運動の指導者でもあつたが。

まつたく、その松山に立つて青い大空と幾

重もの山嶺とのみを眺めてゐる間は、わたくしたちの心からはあわたしい都會生活、そこに生まれて來る醜い人と人との複雑な交渉、息づまりさうな争鬭、排擠といふやうなものは忘れられてしまふのであつた。

空虚な名、地位、富といつたやうなものもここでは一文の價値をも持たないものとなつて來るのであつた。

もしそこに一つの意識が生まれて來るとするならば、それは本然的な人間の疑ひ、本然的な哲學上の疑ひとでもいふべきものであらう。

生死、人間の一生に對する究竟の疑ひ、たゞそれのみであつた。

少くとも或る刹那だけわたくしはそこに坐つて、そのやうなことを考へるともなく考へるだけの落ちつきを見出すことができた。

爐の前に腰を卸してわたくしは松籟の音を聴く。

父が亡つたといふ新しい悲しみが、わたくしが豫期してゐたほど強くはわたくしの胸を撃たないこともある。

どこかにたゞ一つ空虚な世界が生まれたやうな氣がする。わたくしは父の死に對して癡呆の

やうな眼を瞠つてゐる。

長い長い父の貧しい苦しい生涯が客觀的な實在として浮かんてくる。

一人の人間が生まれる。生きる。苦しむ。子を生み、やがて靜かに死んでゆく。

それだけのことに果してどれだけの價值があるか。

人間は生まれなければならぬか、苦しみつゞけても生きてゆかなければならぬか。

父の長い生涯を一つの客觀的な事實としてわたくしは冷たい批判のメスを握らうとしてゐる。

×

午後の三時ごろになれば松山の赤い松の幹を斜に照らして太陽は西の大城に近く傾いてゆく。天城の背の雪がかげつてゆく麓の色に對して、殊に白く浮き上つて見える。

そのころになればほとんど毎日のやうに頬白の群が飛んで来て、赤松の梢から、やがて落松葉の間をあさりながら可憐な聲で囁りわたる。

小身者ではあるが、ともかく色白な春の高い若い立派な一人の武士がわたくしの眼に映つて

来る。

二朱銀を櫛で量つたといはれる大百姓のまなむすがわたくしの眼に映つて来る。

かれらが愚かであつたためか、運といふものがなかつたためか？ そこに二人の不幸な男と女とがある。いつも生活の苦痛に追ひま

られた二人の眼のみがわたくしの心に映つて来る。

御維新になつてから父は酒を造りはじめたといふこともわたくしは聴いた。

三年つゞけて酒を腐らしてしまつたといふことも聴いた。

父が西南戦争に出かけて行つた留守に、わたくしのたゞ一人の兄が死んだといふことも聴いた。父が戦争から歸つて来て泣いたといふことも聴いた。わたくしの兄の死以來母は一生芝居を見なかつた。父も母も人一倍子煩悩であつた。わたくしは長い母の一生涯に、たゞの一度でも母がわたくしの兄の命日を忘れたことを知らない。

わたくしが生まれたころの父はすでに貧乏の底に喘いでゐた。

廣い川に沿うて幾棟かの白壁の酒倉が並んでゐた。川といつても直ぐ近くまで潮がさして來

るので、水はきはめてゆるく流れてゐた。春になれば葦の柔かな若葉が水の下から頭を擽げて來た。かいつぶりがころ、ころ、ころとあはれに鳴いては水をくぐつた。

「あれがお父つあの酒倉だつたよ。」わたくしはよく姉たちから、白い壁の倉を教へられた。

わたくしが知つたころは父は人手に渡つてしまつた酒倉の前の大川を、小船を漕いでは毎日のやうに上り下りしてゐた。舟には眞つ白な石灰が積まれてあつた。父は石灰を賣つては幾人もの子供たちを養つてゐたのであつた。

わたくしは父の石灰舟に乘せられて幾度となく酒倉の前の濁つた川を下つて、さらに廣い本流の大川に出たことがあつた。

本流に出ると父は小ひさな帆をかけた。わたくしは帆をかけた父の舟に乗つた日のうれしさを今でも憶えてゐる。

或る日石灰を積んだまゝ橋の下にもやはれてあつた父の小舟は、石灰に水がはひつたために火を發して燃えてしまつた。父はさらに新しい小舟を作るためには鐵鎚を賣つたり、箒箆ぐるみ母の着物までも賣らなければならなかつた。

恰度そのころであつた。わたくしたちが住んでゐた三百戸ばかりの、川のほとりの農村に赤痢がはやつて来た。衛生思想が發達しなかつたころだつたので、村中ほとんど軒別に人々は疫病にとりつかれてしまつた。わたくしは枕を並べて苦しんでゐる子供たちを看護してゐた母の顔を忘れることはできない。父も赤痢にとりつかれてゐた。それでも父は一日も休まないで、石灰を積んでは小舟を漕いで川を上り下りしてゐた。

母は毎年のやうに子を生んだ。

父の生活は苦しくなつてゆくばかりであつた。

母の家ですでに祖父も祖母もなくなつてしまつた、母の兄は放蕩者ではあつたが、まだ地方では押しも押されぬ大百姓であつた。

わたくしはよく母につれられて一里ばかりの道を母の家まで出かけて行つたことがあつた。

母はわたくしと、わたくしの直ぐの姉の手を引いて亡くなつたわたくしの直ぐの妹を懷に抱いてゐた。

母の兄の家は土堤の下に防風林につゝまれた

屋根の高い大きな屋敷であつた。白い壁の粗倉が土堤の上から直ぐと見出された。

母の兄嫁が、母をつかまへてはいつもちくちく刺すやうなことを言つてゐた。

母はおづ／＼と三人の子供をつれて廣い、暗い土間のなかへはひつて言つた。

わたくしたちは薄暗い板の間で食ふやうに飯を食つた。子供心にもわたくしたちを輕蔑するやうに見つめてゐる叔母の眼が熱ろしかつた。

「まあよく子供ばかり生むのぢやなう。仙之助は満足に食はせることもできませんが。」一度母の兄が、わたくしたちの前で、わたくしの母にかう言つたことがあつた。

氣の弱い母は俯向いてしまつた。わたくしたちは茶碗をかゝへたまゝ叔父の顔を見つめてゐた。

叔父の家にはいつも米俵が高く積んであつた。

父は石灰を積んだ小舟を漕いで二三里も川下の賑かな町へ行つて、三日も四日も歸つて來ないことがあつた。そこには方々の港から集まつて來る船頭や旅人對手の遊女町があつた。

川下の賑かな町へ舟を漕いで行つては幾日も

父が歸つて來ないことが繁々となつた。

母はそのたんびにわたくしたちを連れて、母の實家へ行つた。しかし後には母の家が見える土堤の蔭まで行つて土堤を下りてゆくことをし得なかつた。一番上の姉だけが土堤を下りて行つて、母の家から米を包んだ風呂敷を抱へて歸つて來ることもあつた。わたくしたちは母と一緒に土堤の小蔭に隠れて一番上の姉の歸つて來るのを待つてゐた。

わたくしの直ぐの妹が死んだのもそのころであつた。父は川下の賑かな町から驚いて歸つて來た。

わたくしたちは小ひさな柩に入れられた妹を葬るために、葦の葉の茂みを分けて、田より三四尺小高い砂山の墓地まで歩いて行つた。たゞ二人の姉だけが紋の付いた着物を着てゐた。

わたくしたちの直ぐ後ろから若いひとりの坊さんが歩いてゐた。そして思ひ出したやうに葦の葉の間を歩みながら鉦を叩いた。

誰かが墓穴の傍で火を焚いてゐた。

わたくしたちは墓穴を覗いて見た。底には水がいつぱい溜つてゐた。

小ひさな柩が水の中に卸された。柩は水の上に浮かんてゐた。上から砂を落すたんびにがぼ

がぼと水の音が聞えた。墓の上に小ひきな杭が一本立てられたのみであつた。

わづかに六七人の會葬者たちが薄暗い夕暮の暮の葉を分けながら村の方へ歸つて來た。

「あの時の坊さんにもたうとう御布施一つ出してはない筈だよ。氣の毒なことをした。」父が死んでから一番上の姉がこんな話をしてゐたこともあつた。

勿論、その姉の墓の位置さへ今では探したところで見出すことはできないにちがひない。

「あの子が死んだのは親の毒を受けたからだよ。」わたくしはこのやうな言葉を一度ならず姉の口から聽かされたこともあつた。

しかしわたくしはそれに對して若い日の父を責める氣にはなれなかつた。

人間であるかぎりには、若い男であるかぎりには、誰が昨日の父を責めることができよう。

たゞわたしたちは、水深い墓の底に埋められてしまつたあの妹の運命を氣の毒に思ふ。永遠に墓一つ持つことのできなかつた妹の魂を。

x

父がなぜ故郷を捨ててNの町へ移らなければ

ならなかつたか。貧乏のどん底まで落ちてしまつた父にとつては新らしく開拓せられようとしてゐるNの町へ移つてゆくといふことは大きな冒険であり、あの場合たゞ一つの逃げ場であつたかも知れない。

父は最初たゞ一人でNの町まで出かけて行つた。一ヶ月ばかりの後父は故郷へ歸つて來た。

父はその時山高帽をかむつて、モーニングのやうな洋服を着てゐた。父が何で、そのやうな服装をしてゐたか、それは今日になつてもわたくしにはわからない。

父は川の岸に繋いであつた石灰舟を賣つて、一臺の荷車を買つた。

荷車の上には家財道具だの米だのが積みまゐつた。

二番目の姉だけを一人のこして、わたくしたち五人のきやうだいは父の荷車と一緒に故郷を立たなければならなかつた。

二番目の姉は最後まで氣の毒な人であつた。かの女は口減らしのために叔母の家へ養女になつて行かなければならなかつた。

麥の穂が黄色に熟れてゐたころであつた。わたくしたちは或る水のほとりで急に麥の穂の中にしやがんでしまつた。

「お牧が泣いて走つてゆく。」と一番目の姉が言つた。

二番目の姉が水の彼方の道を泣きながら母の實家の方へ駈けてゆくのであつた。

二番目の姉が土堤下の方へ走つて行く姿を見送りながら、母が眞つ先きに麥畑の中ですゝり上げて泣き出した、姉たちも泣いた。

二番目の姉の姿が麥の穂の中へ隠れた時、なほかの女の髪かざりが赤く穂の上に泳いで行つたのをわたくしは記憶してゐる。

まだ汽車といふものがなかつたので、わたくしたちは父の荷車の後について終日平原の道を歩かなければならなかつた。

わたくしは父の荷車の片隅に、荷物と一緒に載せられたまゝ旅をすることが多かつた。

廣い麥の野原の間を一直線に單調な道がつづいた。一里か或は二里くらゐ麥畑の中を歩くと屹度古びた町があつた。どの町もわたくしたちの故郷よりは賑かであつた。人々は幸福さうに思はれた。

板戸を横にした上に、長い飴だの、土で作つた鳩だの、狐だのが並べられてあつた。また時としてはチャルメラを賣つてゐる男もあつた。

小ひきな花籠を賣つてゐる家もあつた。紫や